

障がいのある子と障がいのない子の 地域での交流のあり方に関する考察(2)

栗原 保

(文教大学教育研究所客員研究員)

A Study on Disabled Children without any Disability Exchanged in Region (2)

KURIBARA TAMOTSU

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

I. はじめに

I-1 社会的動向

内閣府は2012年「障害者に関する世論調査(20歳以上、1,913人)」¹⁾の結果を公表した。世の中に障害者への差別や偏見が「あると思う(56.1%)」と答えた人は「少しある(33.0%)」を含めて89.2%、前回調査(2007年)から6.3%増えた。「あると思う」とする者の年代別の割合は、前回調査と比べ20歳代から50歳代の各世代で高くなっている。また、「障害のある人と気軽に話したり、障害のある人の手助けをしたりしたことが『ある』」と答えた者は70.0%。その理由(複数回答)は、「困っているときはお互い様という気持ちから(53.9%)」が最も高く、以下、「身内などに障害のある人がいて、その大変さを知っているから(35.7%)」、「自分の仕事に関連して(29.4%)」、「近所付き合いや親せき付き合いなどで(17.3%)」、「将来、自分も障害をもつ可能性があるから(16.3%)」の順となっている。5年前と比べて福祉・教育・雇用・まちづくりなどの障害者施策は進んだと思うかの問いには、「進んだと思う(49.0%)」で前回調査より12.2%低下し、「進んだと思わない(42.8)」が10.2%上昇した。

この調査では、障害者差別が「ある」は9割

という実態や障害者行政に対する不満の高まりについて浮き彫りとなったと言える。

教育分野において、ノーマライゼーションに関する普及啓発と共に共生社会を目指す地域における実践が進んでいないことから、障がい児を取り巻く環境づくりや支援など、交流活動に焦点をあてて研究を進める意義は大きいと考える。

I-2 「障がいのある子と障がいのない子の地域での交流のあり方に関する考察(1)」から

中学3年生が学校以外の地域や家庭において「交流の機会がある」と回答したのは16%、双方の交流の機会があった場合に「どうやって接しているのかわからない」などと感じていた。一方、小学生の子どもをもつ保護者も特別支援学校に通う子どもの保護者の双方とも8割以上が交流の必要性を認識していた。次に、具体的な事業の開催について問うと、前者の4割、後者の8割が必要と回答し、両者には大きな差となって現れた。公立学校の保護者の記述の中には「障がいのある子をもつ保護者は本当に交流したいと思っているのか」という回答も多数あり、事業の開催一つをとっても障がいの有無による保護者の当事者意識には隔たりが少なくなかった。

また、事例研究として、公立中学校と特別支援学校の両校PTAが主催した交流事業を調査した。次代を担う子どもたちの成長を願い、PTA（社会教育関係団体）が主体となって学校の教職員に呼びかけ実現し、23年度で18年間継続してきたイベントである。筆者の感想は、子どもたちの笑顔があり子ども達が主体となっているものだった。参加した133名の子どもたちは、「楽しかった・交流出来て良かった（33%）」、「心温まった（32%）」、「来年も参加したい（14%）」など約8割の生徒が好感をもって受け止めていた。「誘導が難しかった」、「接し方に不安が残った」、「心を通わすことができなかった」などとする感想もあった。この事業を開催するに当たりPTA役員は、「年度によって双方で役員の交代がある」、「どうしても短期間で準備するため、前回踏襲型でこなすだけという面もある」などを問題点としている。特に、生徒間の問題が発生した時の対処方法をスタッフ間で確認しておくことも欠かせない。そのため、教職員の協力や適切にサポートする人材の確保は重要となっている。

II. 研究の目的と調査活動

II-1 研究の目的

学校以外の地域における「障がいのある子と障がいのない子の交流」の場を把握し、地域における社会教育事業に資する実証的な研究を行う。調査の対象は、障がいのない子や保護者、特別支援学校に通う子の保護者、それを取り巻く指導者が、地域でどう関わっていくのかに焦点をあてる。

II-2 調査活動

(1) 調査1

地域における子どもの居場所づくりの実態やそれに関わるスタッフの意識の把握を行う。

(2) 調査2

PTAが主体的に取り組む「クリスマス

交流会」の運営状況を把握する。

II-3 調査の概要

(1) 調査1

平成22年7月～11月に、「放課後子ども教室」²⁾と民間の「障害児学童保育」のスタッフを対象に、交流の実態や意識などについて調査を行う。埼玉県内2市の「放課後子ども教室」A市24名（男性9名、女性15名）B市44名（男性2名、女性42名）の計68名に対して質問紙調査を行う。また、埼玉県A市内の民間が運営する「障害児学童保育」2か所の計17名（男性2名、女性15名）に対して質問紙調査とインタビュー調査を行う。

(2) 調査2

平成22年12月、埼玉県C市内の中学校体育館で開催された「クリスマス交流会（公立中学校と特別支援学校のPTAが共催）」に大学生（学習ボランティアサークル役員で大学2年生女子2名）³⁾と共に参与観察を行う。併せて、筆者が関係者へのインタビュー調査を行う。

(3) 「調査2」の参与観察について

大学生と共に行った参与観察は、①事前打合せ、②当日の参観と終了後の意見交換、③事後のふりかえりという一連の流れをとった。①では、「前年度事業の概要説明」と「観察の視点」などを筆者から示した。②では、打ち合わせに基づき各自の視点から観察をお願いし、終了後の感想出しを行った。③では、「評価シート（②で渡しまとめてきてもらうように依頼）」をもとに振り返りを行った。

III. 調査結果と考察

III-1 調査結果

(1) 調査1

今回調査した2市の「放課後子ども教室（計24か所）」において、障がいのある子（例えば、特別支援学級・特別支援学校に

在学する者)の参加があるのは、1か所で2名の児童であった。民間の「障害児学童保育」では、日常障がいのない子の受け入れはないので、障がいのない子との交流は、行政・学校や社会福祉協議会などが行うイベントに参加するなどとしている。

「放課後子ども教室」のスタッフに、「地域における障がいのある子と障がいのない子の交流の必要性」を聞くと「必要である」が90%、「わからない」10%。「『あえてこうした「交流の場」を設けなくても自然と交流が進み双方の意識が改善できるもの』という考えについて「賛同する」19%、「賛同しない」54%、「わからない」は26%であった。「賛同する」の理由では、「日常生活の中で自然と交流が進むので」、「社会全体で差別意識なく受け入れることができるから」。「賛同しない」では、「自然な交流には限界がある」、「機会が少なく健常者の理解が進んでいない」、「親が自ら進んで我が子に交流させようとはしないから」、「社会との接点は増やさないといけないので」。「わからない」と回答したスタッフの理由は、「経験がなくわからない」、「まだまだ難しい点もあると思うので」、「無いよりもあった方がいいかもしれない」。また、「障がいのある子とない子が教室内で交流する際、調整する指導的な立場が必要か」を尋ねると「必要である」87%、「必要でない」4%、「わからない」9%であった。「必要である」とする理由では、「はっきりとした方向性を出すには必要」、「子どもが障がいについてどの程度知っているかはわからないから」、「お互いが戸惑うことがないようにすることが必要」、「必要でない」と「わからない」の理由は、「あくまでもボランティア中心の事業であるので」、「親ができれば特に必要ないかもしれない」などである。民間の「障害児学童」2か所のスタッフに、

「地域における障がいのある子と障がいのない子の交流の必要性」を聞くと「必要である」が94%、「わからない」6%。「必要である」理由として、「同じ社会に生きる人間として当然」、「周りに理解を広げていけたらいい」、「一緒にいることで思いやりの気持ちがでてくる」などであった。「『あえてこうした「交流の場」を設けなくても自然と交流が進み双方の意識が改善できるもの』という考え」について「賛同できない」59%、「わからない」は41%で、「賛同する」としたのはゼロだった。「賛同できない」理由について、「具体的な事業がないと交流などは無理」、「現代は自然解消が難しい時代」、「実際に携わったり身近な存在がいないと理解されない」、「交流する場がなければお互い遠い所からながめているだけ」。「わからない」では、「自然に解消できる可能性が全くないわけではない」。「学校とともに身近な地域において、障がいのある子どもと障がいのない子どもとの交流のための『事業』の必要性」について「必要である」76%、「わからない」20%であった。「必要である」の理由として、「個人だけでは限界がある」、「学校だけでは狭い社会になってしまうから」、「学校や家庭とは違う第三の場として成長できる」、「初めは戸惑いがあっても必要」、「特別支援学校の子と健常児との交流のきっかけが増えていないから」などであった。学童保育のスタッフへのインタビューでは、「本来自然に交流できる当たり前の社会になってほしい(でも現実にはまだまだ)」、「幼稚園や保育園の時から交流があるといい」、「子ども同士の中から理解された方がいい」、「子どもたちだけの交流ではなく親同士の交流が大切」との声があった。

「地域において交流が進まない理由」については、「放課後子ども教室」のスタッフでは、多い順に「共に助け合おうとする意

識が薄いから」、「具体的な実践の検討が難しいから」、「人任せにしているから」「教育と福祉との交流がないから」、「指導員・ボランティアの方が少ないから」。民間の「障害児学童保育」のスタッフでは、多い順に「共に助け合おうとする意識が薄いから」、「教育と福祉との交流がないから」、「行政が動かないから」、「障がい者からの要望をうけとめていないから」、「人任せにしているから」であった。

(2) 調査2

平成22年12月に、埼玉県C市内の中学校体育館で開催された「クリスマス交流会」の概要は次のとおりである。

<概要>

埼玉県C市内の中学校PTAと県立特別支援学校PTAが共催で「クリスマス交流会」を開催した。参加者は130名（内、中学生生徒100名、特別支援学校参加児童・生徒30名）。特別支援学校の児童生徒は、小学部7名、中学部6名、高等部17名であった。14時開会で2時間の交流会であった。中学校の吹奏楽部の演奏や特別支援学校の生徒のよさこいソーランの発表から始まり、グループ対抗のゲームを中心にした活動内容であった。進行は両校の生徒会の役員が行い、両校PTAの役員と教職員が運営面をサポートした。

<質問紙からみた成果など>

・中学校の生徒の感想

(+イメージ)「楽しかった・仲良くなれてよかった・嬉しかった」が38%、「ゲームが楽しかった」24%、「ソーランで盛りあがった・吹奏楽部の演奏が良かった」9%、「小さい子が喜んでくれた・コバトンのおかげで仲良くなれた」5%。

(-イメージ)「どう接していいかわからなかった」11%、「特別支援学校の子供が最初なれなかった」8%、「あまり楽しくない」4%。

・保護者・教員の感想

(中学校のPTA役員)「保護者の人数が昨年より多かった」、「子ども達の嬉しそうな顔が印象的でした」「こうした交流の機会は子ども達にとっては貴重である」、「司会進行はもっとメリハリをつけたらいい、何をやっているのかわからない」。

(中学校の教員)「とてもスムーズに交流会が進行できた」、「特別支援学校の生徒さんがソーラン・ゲームと前面に出ていた初めての取り組みも良かった」、「生徒同士が和気あいあいと交流を楽しむ姿が印象に残っている」、「直接会ってふれあうことが一番だと感じた」。

(特別支援学校の保護者)「中学生の子どもたちが一生懸命対応してくれたのが印象的」、「ウロウロと落ち着かない息子に、にこにこ接していただき有り難かった」、「子どもが最後までこの場に居ることができて良かった」、「いろいろ配慮があり子どもが安定した状態で参加できた」、「本人が楽しかったと言っていたのを聴いて嬉しくなった」、「参加の回数を重ね、親から離れて参加できるようになった」、「楽しそうなグループと全く会話もなくポツンとしているグループもありその差が極端だった」、「なかには話しかけるきっかけがつかめない生徒もいた」。

(特別支援学校の教員)「吹奏楽部の演奏はわかりやすい選曲だった」、「吹奏楽、ソーラン、ゲームとバランスがよかった」、「話を楽しむ時間が十分確保されていて、ゆっくりとした流れでよかった」、「中学生の優しさや気配りをとても感じた」、「特別支援学校の生徒の自然にうちとけた笑顔が見られた」、「司会やゲームの説明などわかりやすく上手だった」。

(次回に向けての意見)「内容がマンネリ化しないように(中学校P役員)」、「親と生徒達の交流も増やしてほしい(中学校P役員)」、「ソーラン以外にみんなで踊れるも

のをもう一つあったら（中学校教員）」、「来年も参加したい（特別支援学校保護者）」、「ゲームは、今回のように皆でできるようなものをやったらい（特別支援学校保護者）」、「早い時間に子ども同士のコミュニケーションを取れば、さらに楽しくできたのではない（特別支援学校保護者）」、「親として、グループの中学生とどれくらいの距離をもって関わるべきか、自分の子どもの様子を見ながら迷った（特別支援学校保護者）」、「小学校低学年の子には楽しみづらかったのでは（特別支援学校保護者）」、「小・中・高の学部ごとのグループに分けてそれぞれ楽しめる内容を考えてはどうか（特別支援学校保護者）」、「中学校の参加希望者が多すぎて事前にカットしたと聞いた。ペアリング以外にも参加方法がないかを、次回は検討してみてもどうか（特別支援学校保護者）」。

<インタビュー調査からみた成果など>

（中学校PTA会長）「20年近く継続しているこの事業の重みを感じます。この事業の始まりは、吹奏楽部の演奏を披露する機会をつくりたいというところからスタートしていた。ここ数年、参加する生徒数も増えているし、保護者の方もこうした取り組みが本校の特色となっているという前向きな発言をよく耳にします。定着してきているという実感をもっています。」

（特別支援学校PTA会長）「進行を行う中学校の生徒会役員2名が、事前に本校を先生と一緒に打ち合わせにきてくれました。特別支援学校での生活や学習の様子を見学することで、企画や運営などに活かせたと話していました。少しずつ改善できている事業だと思っています。また、特別支援学校からの参加者が横ばいとなっている点が気になりますが、広報紙などを使ってPRをしていきます。」

（中学校長）「昨年と比べて、生徒の意識も

高まり参加生徒が増えた。本校では、さまざまなボランティア活動を生徒自身が取り組んでいる成果の現れが、クリスマス交流会の参加となったのではないかと。特別支援学校の生徒と楽しい時間を共有しようと自然と感じていたのではないかと。男子生徒の参加も多く、教師からの勧めというより、自主的にという雰囲気が醸成されていると分析している。生徒が『どう接していいかわからない』という事に対しては、学校の学びの中で、人権教育や道徳の授業として参加生徒だけでなく全員を対象に事前学習会を行うことも可能である。」

（特別支援学校長）「PTAの支部活動として主体的な取組みとして高く評価している。学校では卒業生との関わりや地域での活動にまで目配せしたくても現状ではできない状況がある中で、地道に地区活動として継続している。どうしても地域の中では、互いの関わりが少ないため相互理解が足りなくなる。どうしても、地域では健常者中心の生活であり、障がいのある人たちが参加することに消極的になってしまっている。こうした取組みが各市町に拡大していくことを望んでいる。」

（中学校生徒会役員）「事業の準備の一環として、特別支援学校を訪問できたのが良かった。自信をもってのぞめました。会場のセッティングや皆さんに配る名札のこと、受付の出迎えの方法など前回と変え、成功したという実感がもてた。」

(3) 参与観察

<プログラムにそった時系列での見方>

ア「受付時の様子について」：両学校の受付が別だと交流の機会が減ってしまう。受付と子ども同士のマッチングの場所が一緒だったのでゴチャゴチャしていたので場所を変えたほうがすっきりする。

中学生が同じグループ担当の子を迎えに行くのが遅い。グループ構成を、特別支援学

校の子ども、中学生、親で構成してもいいかもしれない。中学生が受付付近でただかたまっているだけだった。

イ「会場の設定について」：飾り付けがきれい、装飾はよかった。PTA保護者分のイスは事前にだしておく。

会場は広々していい。サンタの衣装を着ている中学生（役員・リーダー）がいて雰囲気があってよかったが、紹介するでもなくそれでいいのかという感じがする。

ウ「プログラムの前半（セレモニー）について」：吹奏楽部の演奏はみんな知っている曲だったのがよかった。アップテンポの曲だったので、盛り上がる場面があり楽しそうだった。コバトンをもっと目立たせてもいい。難しい挨拶は要らないし、待ち時間が長くなって飽きてしまう。曲に手拍子をするがしたり、踊りのある曲なら前に誰か出て踊ってもいい。歌詞があるとみんなで歌える。

エ「プログラムの中盤について」：ソーラン節はみんな楽しそうだった、2回踊ったり舞台上がることも出来るなら、最初の説明で伝えたほうがいい。中学生がもっとしっかり踊るべき。

オ「プログラムの後半（セレモニー）について」：玉運びゲームは、4人で協力しないと出来ないところがよかった、おしゃべりタイムが少し長かったように感じた。保護者も参加できたらいい。ここでも交流するならゲームがあったほうがいい。中学生同士のおしゃべりが多くなっていた。

カ「解散時の様子について」：別れを惜しむ様子の所もいくつかあった。特別支援学校のお母さんと仲良くなる中学生もいて去りがたい雰囲気があった。解散時は、それぞれの列で帰ると流れがスムーズでいい。

<参加した対象に絞っての見方>

ア「保護者の動き」：子どもたちをしっかりとサポートできていたが、特別支援学校と中

学校の保護者同士が離れていた所に座って交流ができていないのが残念だった。もっと保護者同士が話せるといい。ゲームに参加すると雰囲気が違う。保護者が主体の事業と試してみたいがそうではなかった。

イ「教職員の動き」：誰が教職員なのかわからなかったが、備品の出し入れなどあまり表に出ない所でしっかりサポートしていたと思う。教職員もゲームに参加すると楽しい雰囲気になる。

ウ「児童生徒の動き」：特に変化は感じられなかったが、お母さんが近くにいることで安心した顔をしている子もいた。楽しくやっている子もいたが、一人でボツンとしてしまった子もいた。音楽が多く楽しかったのではないか。中学生は消極的・恥ずかしがっていた、というより戸惑っていたのかもしれない。とはいっても頑張っていた方なのではないか。自分から進んで参加しているにしては、あまりにもという感じもする。しゃべらないし、どうしていいのかわからない感じ。ちゃんと対応している人もいたので、男女混合のグループ編制なら違っていたかもしれない。はじめは一緒にやろうと努力した姿はあったが、輪になっていなかったり、おしゃべりタイムで手持ち無沙汰の様子だった。

エ「中学生の印象は」：消極的だと感じた、特に男の子、中学生だけで固まっていた、特別支援学校の子から離れて座っているグループもいくつかあった。自分の母親がいて恥ずかしいのか、適当にソーラン節やラジオ体操をしている子も多かった。積極的な子は全体を楽しくしていたが、恥ずかしさがあつて自分の友達中心になっている子も多かった。中学生にとって見本となる人がいないので、積極的にかかわれずに流されてしまうのではないか。大学生ぐらいになれば自分から行かなくちゃという気構え

があるのと大きな違いである。小学生のころから交流していれば、当たり前になるが、思春期のまっただ中だといきなりは難しいかも。他人の目も気になる。友達関係も気にする。ボランティアにも疑念を抱くし、付き合いや無理やり来ている子もいるかもしれない。中学生という難しい時期では、こうしたことはムダではないと思うが、これでもう絶対嫌だと思える人もいるかもしれないので、かえって逆効果かもと考える。中学生を引っ張ってくれる人がいないとなおさらだめになる。「改善が必要と感ずること」として、お母さん同士の交流を。子ども主体の場とするのはいいがその工夫が大事。前段階の交流の機会を設定し、本番で盛り上げるというのもいいかもしれない。

Ⅲ－２ 考察

- (1) 地域での居場所づくりを担うスタッフの9割が交流の必要性を指摘
「放課後子ども教室」と「障害児学童」のスタッフの9割以上が、地域での交流の必要性和感じている。一方「交流が進まない理由」として、双方が「共に助け合おうとする意識が薄いから」を一番に上げ、「人任せにしているから」、「教育と福祉の交流がないから」などと続く。具体的な実践の積み重ねや指導者層の少なさを放課後子ども教室関係者は指摘し、行政の動きの少なさを障害児学童のスタッフが取り上げている。また、『あえてこうした「交流の場」を設けなくても自然と交流が進み双方の意識が改善できるか』については、「賛同できない（自然とは解消できない）」は双方で5割を超え、何らかの手立てが必要だとしている。「障害児学童」のスタッフの4割が「わからない（自然と解消する可能性は全くないわけではない等）」とも回答している。また、「事業の必要性」について7割強が賛同しており、学校や家庭以外の

第3の場（地域）での交流の機会を具体策の一つとして認識している。放課後子ども教室のスタッフと比べて、学童の関係者には切実感がある。改善したいと強く意識する一方、実現するために超えなければならない多くのことを認識しているのをひしひしと感じる。

- (2) 保護者などのサポートで安心して子どもたちの交流が深められている
中学生の7割以上がこの事業をプラスのイメージで捉えている。「楽しかった」、「仲良くなれてよかった」とし、また来年への参加の意向を示している。参加に応募した生徒は全生徒の4割以上に上るなどこの交流事業が定着していることがわかる。特別支援学校の保護者からは、「参加の回数を重ね、親から離れて参加できるようになった」、「本人が楽しかったといったのを聴いて嬉しくなった」など成果を実感していた。しかし、本当に親が望むのは「地域にお友達ができて守ってほしい」、「小学校低・中学年では地域の子に声をかけてほしいと思うが、高学年になるとお互いにかべができてしまうこともありづらい」という本音も聞かれた。双方のPTA関係者や教員からは、保護者の参加増や効果的な生徒会中心の進行、中学生の積極的な参加と優しい対応など前回以上の成果があったとの実感をもっている。様々な準備の中でも、特に、中学校生徒会役員の特別支援学校での事前打ち合わせに初参加という取組みが今回成功の要因として捉えていることは今後へ期待できるものとなった。
- (3) 大学生の評価シートなどから交流事業の改善の視点が明確になった
参観した大学生の改善への指摘は次の3点であった。1点目は、保護者が傍観的にならずに交流に積極的に参加する。2点目は、中学生が自然に接することができるような手立てを考える。3点目、受付から全体交

流・グループ内での交流などの運営方法を改善する。いずれも重要な指摘となった。

1 点目では、保護者は子どもたちをサポートする役割を果たしているが、遠巻きに見つめるという姿勢になりがちで一体感に欠ける。子どもたちと一緒にすることで雰囲気づくりをさらに高めることができる。もっと保護者同士が話しできるといい。ゲームに参加するとまた違う。具体的には、グループを中学校・特別支援学校・保護者の3者で構成してはという提案である。

2 点目、多くの中学生がどう接しているかわからず、途中で働きかけをあきらめたり、思いはあっても行動に表れない点を改善する。具体的には、特別支援学校の一人一人の子どもの特長を書いた「サポートカード」を事前に作成しておき交流の参考にする。当日、時間をとって保護者とのうちあわせを実施する。また、障害に関する理解を深める学習の機会を事前に設定する。さらに、これまで参加してきた中学校の卒業生にも呼びかけリーダー的存在として加わってもらうなどが考えられる。

3 点目は、交流がしやすいような環境をつくるということで、具体的に、両校の受付場所を一体にすることで、子どもも保護者等も開始前から交流をし易くする。また一体感を盛り上げるゲームを増やしプログラムの充実を図ることもできる。

IV. 総合考察

(1) 「障がいのある子に真正面から向き合う」という視点にたち交流事業を改善する

この事業のねらいは、子ども同士の交流を促進し、わだかまりを解消する心の内からの改善である。大学生が自分自身の経験を語った中で、「自分をふりかえると、はじめは『何で言葉がっじないの、多動傾向と緘黙での違いがなぜあるのか』など何度も自問をした」という。この事業での中学

生の様子は、「私が、はじめての感覚とまったく変わらない」と話すように、この原点から出発してプログラムの立案、運営方法の改善、事前の準備を行うことが原点となる。PTA役員は年度によって双方で交代があり、行事をこなすだけとの側面もある中で、21年度と比較して、22年度は新たな改善も図られ、双方のPTA関係者がさらに熱意を持って取り組んでいた。今後、原点を見つめてさらなる改善を期待する。

(2) 地域の交流の場として「放課後子ども教室」を改善できないか

「放課後子ども教室」の趣旨は、心豊かでたくましい子どもを社会全体で育むため、地域の多様な方々の参画を得て「居場所」をつくることである。埼玉県内でも6割を超える市町村で実践が行われている。しかし、障がいのある子の参加を受け入れ、障がいのない子との交流を実現できているところは少ない。組織づくりについて行政側の提案と共に地域からの主体的な取組みは欠かせないところである。PTAの交流事例は、わが子を含めた地域の子どもの健全な育成をしたいという熱意が込められ、永年継続し地域に定着してきていると考えられる。こうした経験を生かし、「放課後子ども教室」という事業の中に障がいのある子を受け入れるヒントになるのではないか。参加一つをとっても特別支援学校や各家庭からでは遠距離という物理的なことも考えなくてはいけない。また、専門的な指導者やボランティアスタッフの増員なども必要となる。学校や行政、NPO団体などが協働して組織化を図っていく必要がある。地域における子どもの居場所づくりを子ども目線から捉えることで、「体験が少ないことにより知識が乏しくなっている」、「周囲の理解不足から偏見やいじめにつながっている」、「障がい者を下に見る傾向がある」、「障がいのない子の意識に問題がある」と

の見方を改善していく。

V. おわりに

地域に住む保護者が中心となって行われる交流会はなかなか見当たらない。この交流事業は、23年度で18年間継続しており両校PTA関係者の努力の賜物である。敬意を表するところである。筆者が関わって3年が経過し、双方のPTA役員と信頼関係ができ、今回大学生とともに交流事業の様子を丁寧に参与観察できた。大学生は日ごろから地域において障害児との交流経験を生かして、筆者との打ち合わせ等の手順を踏むことで確かな情報を共有していくことができたと感じている。彼らが「自分たちの活動では、参加する子ども一人一人の状況把握が大前提である。当日必ず、保護者から聞き取りをして活動に入る。」という言葉が忘れられない。彼らのお陰で子どもの目線にたったプログラムの留意点が見えてきた。例えば、出迎えからグループ内での会話などの子ども同士の交流の様子を中心に、受付の設置場所やプログラムの流れなど多くの指摘があった。また、個々のプログラムのねらいや配慮事項が明確でないことから逆に差別意識を助長することになりかねないことや、事前の打合せや準備の質・量ともに改善点が明確になった。とても参考になることばかりだった。ここで得た結果を、今後PTA役員にフィードバックしたい。学童保育のスタッフや保護者の言葉にあったように、「交流の機会があつてこそ前に進んでいく。何よりも子どもの心の内から進めることである。」少しずつでもいいから改善を加え前進していくことが肝心だと思っている。現状として、年齢が上がると日常での交流が少なくなってしまう中で、互いの違和感を取り除くには、しっかりと教育的なプログラムを社会教育関係者がもって臨むことだと考える。それがなければ信頼関係は築けない。今後、「放課後子ども教室」の中で、地域における

子どもの居場所として交流が自然とできるようになったり、社会教育施設での取組みなどにも拡大していく努力を期待したい。引き続き、筆者がこの事業に関わりその成果を発信できるように努力していく。

(注釈)

- 1) この調査は、1987年からほぼ5年毎の実施で今回が6回目。2012年7月～8月全国の成人3,000人を対象に行い回収率は63.8%。政府は年度内に策定予定の「障害者基本計画」に結果を反映させる予定。
- 2) 未来の日本を創る心豊かでたくましい子どもを社会全体で育むため、文部科学省は平成19年度より「放課後子ども教室推進事業」を創設した。この事業内容は、小学校の余裕教室等を活用して、地域の多様な方々の参画を得て、子どもたちとともに行う学習やスポーツ・文化活動等を行うもの。埼玉県（さいたま市・川越市を除く）では、平成23年4月現在、39市町で294か所の設置となっている。
- 3) 大学が認定する「学習ボランティアサークル（結成20年を超え30名弱の会員を有する）」の代表者。休日の土曜の午後、特別支援学校に通う子ども達を、地域の公共施設を会場として、学習会や大学生との交流を図っている。その他、保護者と一緒に一泊のお泊り会や一日遠足なども実施している。

(参考文献)

- 白石正久『障害児がそだつ放課後』かもがわ出版、2007年11月
- 全国学童保育連絡協議会『学童保育ハンドブック』ぎょうせい、2007年3月
- 国民生活センター相談調査部調査室編『学童保育の実態と課題に関する調査研究』国民生活センター、2008年2月
- 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会

自由研究

津止正敏、津村恵子、丸山啓史『障害児の放課後支援の今とこれから－全国調査（自治体調査・保護者調査）報告書－』立命館大学人間科学研究所、2008年

全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会編『障害のある子どもの放課後活動促進に関する調査研究』総合的な放課後対策推進のための調査研究報告書、2008年2月

丸山啓史『特別支援学校に通う障害のある子どもの放課後・休日支援の現状と課題－京都府における保護者対象質問紙調査より－』京都大学紀要、2009年

『平成23年度「学校応援団」「放課後子ども教室」実践事例集』埼玉県教育委員会、2012年3月